様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：２４３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３５００５０

研究課題名（和文）「遊び仕事」が内包する自然共生行動の解明と環境教育への導入

研究課題名（英文）Elucidation of natural symbiotic behaviors encompassed by "Asobi-shigoto" and introduction to environmental education

研究代表者
三橋　俊雄（Mitsuhashi, Toshio）

京都府立大学・生命環境科学研究科・研究員

研究者番号：６０２３９２９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「遊び仕事」のあり方に着目し、京都府丹後半島及び台湾原住民族を対象にしてその実相を明らかにした。
台湾原住民タロマク族の調査では、狩猟活動を自然共生型や集落共同体のあり方を内包する遊び仕事として捉え、民俗学的視点より狩猟のプロセス、道具、信仰、狩猟の名誉などを考察した。結果、Taromak 族の狩猟には、肉の分配や神・霊に対するパリシの行為など、自然と対峙しながらも誇り・分かち合い・自然への感謝など、狩猟を通した自然観が継がれている実態が確認できた。また、彼らの狩猟行動・狩猟文化には従来の遊び仕事の概念に加えて民族の誇り・自然への畏怖と信仰・共同体の堅持などへの強い意思が内包されていた。

研究成果の概要（英文）：In this research, focusing on the way of "Asobi-shigoto", I surveyed the Tango Peninsula in Kyoto prefecture and Taiwan indigenous peoples, and revealed the realities. Taiwanese aboriginal Taromak tribes surveyed hunting activities as "Asobi-shigoto" involving nature symbiosis and village community way and considered the hunting process, tools, faith, honor's honor from the folklore perspective.
As a result, in the hunting of the Taromak tribe, the view of nature through hunting, such as division of meat and parisi's act against God and spirit, such as pride, sharing, and nature appreciation, while confronting nature is inherited I was able to confirm the actual situation. Also, their hunting behavior and hunting culture included a strong intention to raise ethnic pride, fear of nature and faith, adherence to the community, in addition to the concept of conventional " Asobi-shigoto".

研究分野：生活文化学

キーワード：遊び仕事　自然共生　生活文化　サブシステンス　台湾原住民　Taromak族　狩猟文化

１．研究開始当初の背景

研究代表者らは、日本人の生活が自然から乖離しバーチャルな世界に移行しつつある現代社会において、海のタコ・イカ釣り･イワノリ摘み、川のウナギ・フナ・エビ捕り、山のウサギ捕り・山菜摘みなど、京都府丹後半島の農山漁村で、今も日常生活の中でワクワクと心躍らせながら行われている「遊び仕事（マイナーサブシステンス）」に着目した。基盤研究(B)「自然共生型の生活文化・行動を内包するマイナーサブシステンス(遊び仕事)研究の構築」(平成 22～24 年度)では、その「遊び仕事」が現代日本人の生活・行動を自然共生に向かわせる第一歩、人間生活と自然を結びつけるブレークスルー(突破口)になり得ると確信し、「遊び仕事」を、感動しながら自然と共生することができる貴重な生活文化的・民俗学的行為として、また、自然と人間が対等に向き合える「等身大」の共生の場として、その今日的意義について検討を重ねてきた。

一方、イヴァン・イリイチ(Ivan Illich)が主張する「サブシステンス（自立自存）概念」との出逢いを契機に、元来、自然共生の中で営まれてきたはずの人間生活の諸活動が、現在、「体制・市場・産業的サービス」の受け手に甘んじ、その結果、日本人の自立自存の生活・行動が消失し、「生身」の生活から「切り身」の生活(鬼頭秀一、1996)へと変容しつつある今日、本研究では、現代社会において忘れかけ消滅しかけている「遊び仕事」を、人間のサブシステンス(自立自存)な行為として捉え直し、環境教育の中で生かすべき「生身」の教材であると考えた。

折しも、東日本大震災が社会に及ぼした衝撃と影響は、従来の日本人の生活スタイルや価値基準を大きく揺るがし、本来、自然と共生しながら暮らしてきた日本人の自立自存・サブシステンスな生き方が問われ始めてきたところでもある。

本研究は、人間生活と自然が乖離し、ゆえに自然が荒廃しつつある現在、自然の中から「食」を得る「遊び仕事」の自然共生的特質に着目し、京都府丹後半島をフィールドとして、生活文化学・民俗学・自然共生行動学の視角から実地踏査し、その自然と共生する行動や共同体的規範の実相を明らかにするものである。また、現今の「サービス漬け社会」に対して、遊び仕事が内包する「自分の力で生きる＝サブシステンス力」の今日的意義について解明することを目指す。

２．研究の目的

(1)生活文化学･民俗学･自然共生行動学の視角から、貴重な「無形民俗文化」としての「遊び仕事」の実態を、丹後半島の農山漁村をフィールドとして明らかにする。

(2) 複眼的な評価指針を設定して、「遊び仕事」の持つ自然共生行動や共同体的規範など、今日的な自然共生の意味について考察する。

(3)今日の「サービス漬け社会」「切り身社会」に対する、遊び仕事に内在するサブシステンス(自立自存)な生き方や生活哲学､生活技術に関する今日的な価値について検討する。

(4)加えて、平成 27 年度より、台湾原住民 Taromak 族における自然共生型の生き方やゲマインシャフト的なコミュニティのあり方に焦点を当て、民俗学的な視点から、現在も続けられている住民と自然との交通である「遊び仕事」についてその特質を明らかにする。

３．研究の方法

(1)遊び仕事の生活文化・民俗学・人間行動学的調査

宮津市(養老地区、上世屋地区、由良地区)、京丹後市(袖志地区)､伊根町(伊根浦地区)などを対象として､「遊び仕事」に関する資料調査、聞き取り調査、参与観察を中心に、生活デザイン計画学/道具学、農学、生活科学などの視点から学際的に討議･研究する。また、大学院生が RA として実地調査・データの整理等を担当する。

(2)遊び仕事に見られる自然共生行動や共同体的規範の実相の解明

「遊び仕事」には、それを成立せしめている自然共生行動として､集落共同体における行動規範(例えば、京丹後市袖志地区におけるイワノリ摘みの「山の口開け」やアワビ採集の殻長制限、宮津市由良地区における手長エビ漁のモンドリ数制限など)や､生活哲学(自給自足･必要十分･もったいない･互酬性など)が内在する｡このような人と自然の共生的な関係を学際的に解明していく。

(3)遊び仕事に内在する「サブシステンス力」の今日的価値の解明

現在、市場経済や産業的サービスの受け手に甘んじ、その結果、生活の自立自存的基盤が破壊されつつある現代社会において、ほんとうの豊かさや人間らしい生き方とは何かを念頭に置き、「遊び仕事」を人間のサブシステンス(自立自存)な行為・活動として捉え直し、いかに自立自存、自給自足、自然とともに自分の力で生きるサブシステンスな力が今求められているかを、現代日本人のライフスタイルと対比させながら、その今日的価値について明らかにする。

(4)Taromak 族における自然観の解明とその生活総体の把握

本研究では、植物採集に焦点を当て、採集行動の目的である食物・燃料・器具・薬・通過儀礼などの各項目について、自然との関わり・族人同士の関わりなどに焦点を当て探っていく。

４．研究成果

京都府丹後半島における｢遊び仕事｣研究では、京都府宮津市由良川流域の生活実態調査から､(1)ほと

んどの食材は購入しないで自分でつくる「自給自足 self-sufficiency」、(2)手長エビ漁は食べきれる量だけおこなう「必要十分 sufficient」、(3)手長エビ漁の仕掛けは 20 基以内とする「共同体の規範 community rule」、(4)タラの芽は同じところから 3 度摘まない「自己の行動規範 self standard」、(5)浜でほかす雑魚小魚をもらい調理する「もったいない精神 don't waste」、(6)筍・ミョウガなどを塩漬けして保存する「備え・保存 preparation」、(7)手長エビは高級食材でも市場に出さない「非市場経済性 non-market economy」、(8)物々交換やおたがいさまの気持ちで地域共生する「互酬性 reciprocity」などのサブシステンス力の概念(evaluative criteria for the subsistence)を導いた。また、京丹後市袖志地区における採藻業「おかずとり」においては、自然と共生してきた漁民の生活文化や共同体的規範などについて、その実態を確認することができた。

27 年度ならびに 28 年度は、当初の調査計画に加えて、台湾 Taromak 族における「遊び仕事」に調査対象を拡大し、日本における自然共生・自立自存のあり方との比較検討を念頭に置きながら、研究を進めることとした。それは、現代の日本および台湾における近代化の大きなうねりの中で、「遊び仕事」が志向する自然共生の姿勢、自立自存・サブシステンスの姿勢とは何かを相対的に探求し、また、多くの現代人にその「遊び仕事」の価値を伝えていくためにも肝要であるとの判断からであった。

そこで、本研究では、台湾原住民 Taromak 族における自然共生型の生き方やゲマインシャフト的なコミュニティのあり方に焦点を当て、民俗学的な視点から、現在も続けられている住民と自然とのかかわりを「遊び仕事」の視角から、特に、生活に密着した植物採集事例を通じた(1)食物、(2)燃料、(3)道具、(4)薬、(5)通過儀礼などの特質について明らかにすることにした。現地調査は、2014 年～2015 年に合計 3 回、12 週間にわたり、合計 33 名(女性 15 名、男性 18 名)にインタビュー調査を実施し、以下の状況を把握した。

(1)食物としての利用：家の近くに小規模の畑を持つ場合が多い。1 月 1 日に大部分の土地にアワを植える。よく生産される副次的な農産物は落花生、さつまいもなど 14 種類。5 月中旬アワ収穫後、経済性のあるローゼルが植えられる。収穫した副次的な農産物は自家用または親戚に配ることが多い。よく採集される山菜の品種は龍葵、刺蔥、昭和菜など 11 種類、ほぼ年中採集可能である。筍は長枝竹、刺竹、麻竹が主に夏採集される。高山に自生する台灣胡椒、山蘇、藤心などは猟師が猟へ行くついでに採ってくる。伝統的な料理の(Abai)は粟に豚肉の具を入れて假酸漿の葉で包み込み、さらに香りの良い月桃の葉で包んで鍋で煮る。祝い事には欠かせない假酸漿と月桃は入手し易い場所に植えられる。

(2)燃料としての利用：現代的なガスコロンが整備されているが、室外の前庭で薪を焚き調理する。調理で生じた煙は悪いもの(悪霊)を避けるといわれ、石板家屋では必ず薪を焚く習慣がある。また、その煙は蚊よけの効果もあり、焚き火を囲んで家族と楽しく団らんする様子もよく見られた。薪ストーブで風呂の湯を焚くが、一旦お湯を沸かすと朝まで熱湯が出る。薪の材料は山奥や海岸から拾ってくる。樹種は多様であるが、例えば、密花苧麻は燃えやすいが火持ち性能は低く、一方、九芎、無患子、白雞油、相思樹は火持ちが良く煙も少ない。

(3)道具としての利用：檳榔の葉鞘は水に沈め柔らかくして皿の形や団扇の形に加工して使用する。月桃の葉は天然のラップ材として食物を包むために使われ、葉の繊維は乾燥させて編み物の材料にしたり座布団や鳥籠づくりに使用された。屏東鉄莧の葉は、表面に細かい白い毛が生えて柔らかく、野外のトイレットペーパーとして使われたり、葉幅の広い姑婆芋が雨具に利用されたりした。粟を脱穀する臼は柔らかい糙葉榕、菜豆樹、山黄麻が使用され、杵は堅くて割れにくい欅木や朴樹が良しとされた。男性が帯刀する鞘は乾燥しやすいので軽く割れにくい大葉楠や白雞油の木が使われる。青年団にとって重要な警報具の「臀鈴」も大葉楠や白雞油の木で作られ、緊急時に青年が腰に挿して村中を走り情報を知らせた。一方、密度・堅さが高い茄苳は伝統建造物内部の祖霊柱に使用されている。

(4)薬品としての利用：婦人が頭に被るシダ植物と花を用いた花輪は頭を冷やす効果があると言われ、また、女性の生理には花輪を被ったり有骨消を焼いて腹部に付けたりして痛みを減らす心理的な治療法がある。また、熱があるとき白茅の根を車前草の葉と共に沸かして飲む。頭痛や腰の痛みには臭娘子の葉の絞り汁を塗るが、それは消炎鎮痛剤としての効用をもつ。切り傷には菝契の葉を叩いて貼る。毒草に触ったり毒蛇に噛まられたときは姑婆芋の汁を塗ると症状がおさまる。蒸し暑い夏の日常的飲み物として紫背草の茎や根を七葉蘭の葉とともに沸かして飲む。香椿の茶葉は血糖値を下げる効果があり糖尿病を治癒すると考えられている。

(5)通過儀礼としての利用 (a) 青年団と植物の利用：青年会所制度は東ルカイ族の特徴のひとつで、男子会所は年齢的な階級組織である。1960 年代末までは 15 歳になった少年が強制的に会所に住み共同生活を送った。現在は、中学校入学時に入所資格を得て夏休みの約 1 ヶ月間会所に居住し、粟収穫祭を準備すると共に体力の訓練や共同体の規範などが受け継がれる。青年団の階級制は三段階あり、第一段階は Balisen、次に bansaler、最後に abara となる。通過儀礼では長老とシニア青年が毒草である咬人貓、咬人狗を持ち、順番に青年の体を叩く。前者は痒い症状が出て一日中続き、後者は細かい毛があり肌の毛穴まで滲み込むので刺すような痛みを感じ

何週間も続く。abara になると、男性の象徴である頭飾をつけ、華麗な服装を着ることができる。
(6)通過儀礼としての利用 (b) 粟収穫祭(kaLalisiya)と植物の利用：粟は最も重要な作物である。粟は 12 月に粟畑を整地し、2～3 月に粟種を撒き、4 月の粟除草、6～7 月の粟収穫時期がある。4 月の女性による除草祭と 7 月の粟収穫祭は最も重要な行事である。収穫祭のために、都市部に住む青年達が村に戻ってきて、1 ヶ月間をかけて祭りの準備をする。祭りの広場で四本の刺竹を用いて約 12 メートルの高さのブランコを立ち上げ、そのブランコを中心にお祝いの儀礼が行われる。この儀礼は、男女青年団が交際する機会となる。ブランコを建設するために男子青年団は山の奥に入り直立で太い刺竹を探し、道がない森の中、約 17 メートルの刺竹を協力して運ぶ。また女子青年団は、縛る材のために山に入って葛藤、血藤、黄藤を採集し、丈夫にするための工夫をする。女性が立つブランコの綱の部位は堅くて太い血藤と綿縄を芯とし、外側は弾力性のある葛藤を巻いて作る。四本の刺竹の交差部は丈夫な黄藤でからげて縛る。この準備期間は、都市部の Taromak 族にとって自らの労働を通じて伝統的な生活文化に触れ合い、民族アイデンティティーを再認識する重要な伝承の場となっている。
(7)通過儀礼としての利用 (c) 婚約の行事と植物利用：男性は結婚の相手ができたら、毎日その女性の家に薪集めや農作業などの仕事を手伝いに行く。女性の親に認められると、婚約を結ぶまで毎年特定な形式で試練がためされる。一年目は檳榔の果実を贈る。男性側の長老と青年団が最適な檳榔の樹を選定する。緑々しく果実が大きければ大きいほど誠意が充分含まれているという意味がある。選定後、男性はその檳榔の樹に登り果実と一緒に樹の上部に繋がっている上弦の月型の輪の部分を取る。その形は女性の純潔を意味し、女性の家まで運ぶ。この一連の行動を「送檳榔」という。男性は二年目以後も婚約を結ぶまで毎年薪に使う木材を贈るが、燃焼時に温度が高く煙が少ない九芎、無患子、白雞油の材が適している。また、その薪を運ぶ道具や作法もある。
(8)結論：以上、本研究では、自然に働きかけ、自然と「生身」の関係で共生してきた台湾 Taromak 族における植物採集の行動を、経済的な生業活動と同等な重みで、現在もなお脈々と受け継がれてきている「小さな生業」、自然のなかに身体をおき身体を媒介として対象物を採集・利用する行為、さらには祭りや通過儀礼における精神的文化的行動などを含む「遊び仕事」と捉え、その特質を以下のように読み取った。
(1)食料としての野草に関する広範な知識を共有し、殆どの食材を自らの手で採取し、また、その野草を用いた様々な調理法や料理が伝承され、実行されていることが明らかになった。
(2)近代化によるガスの普及にもかかわらず、多くの住民は屋外で薪を焚く慣習を続けており、燃料材としての植物の性質を熟知した「火を扱う知恵」「火を囲み楽しむ生活」など「火の文化」が伝承されていた。
(3)道具としての利用についても、植物の材質や形状に関する伝統的知識が活かされ、植物利用における「適材適所」や、自然物の形態を人間の道具として見立て利用する「ブリコラージュ」の概念が最大限に活かされ、また、神聖な道具には自然に対する畏怖心・信仰心がいまも生き続けていることが明らかになった。
(4)Taromak 族の暮らしにおいて、日常の病気や怪我に対して様々な野生の植物が薬草として用いられ、そうした豊かな薬草の知恵が「野生の科学」として現在も伝承されていた。
(5)青年団の慣習には、成年男子に対して伝統的・共同体的な成人教育が青年会所と呼ばれる建物を拠点に行われ、植物を介して山地狩猟の厳しさに耐えられる肉体的・精神的修行・訓練が、依然として継続されていた。
(6)粟収穫祭における植物の意味として、祭りで使用されるブランコの支柱、綱、縛り縄が野生の植物を採取・加工して利用され、また、自然素材と伝統的な技法を用いることによってのみ、祭りの神聖性、伝統行事の精神性が保たれることが見て取れた。
(7)婚約の行事においても、婚約を結ぶまでに行われる行事(檳榔の果実やその月型の輪を贈る「送檳榔」、女性の家まで薪を運ぶ運搬用具と運搬方法)には、特定の植物が使用され伝統的作法によって執り行われていた。

このように、台湾原住民 Taromak 族の生き方には、近代的社会や近代的技術に容易に触れることができる環境にあっても、独自文化の「伝統的真正性」にこだわって生きようとする姿勢が見られ、その背景には、自然を知り尽くし自然と濃密に関わり合いながら互いに助け合う、「共同労働」や「共同享楽」に基づくゲマインシャフト的なコミュニティが存在し、さらに、エスニック・アイデンティティを次世代に継承していこうとする民族の強い意志、深い想いが見てとれた。また、「遊び仕事」のもつ象徴性には彼らの「喜び」や「誇り」と連動した「自然共生型の生き方」が息づき、加えて、Taromak 族の「遊び仕事」には、市場経済と繋がる「労働」ではなく、自然と共生してきた生活文化・生活技術を継承し、そうした暮らしや「生きる」ことそのものと本質的な関わりを持つ「使用価値を作り出す労働」が内包されていることが明らかになった。

加えて、28 年度は、台湾原住民 Taromak 族が慣習的に行なってきた狩猟活動を、自然共生型の生き方や集落共同体のあり方を内包する重要な「遊び仕事」として捉え、狩猟活動のプロセス、道具、禁忌・儀礼を含めた精神文化について、民俗学的視点より

考察した。

2014 年 11 月～12 月に実施した Taromak 族の狩猟事情の予備調査と『台湾総督府蕃族調査会蕃族調査報告書–排彎族・獅設族』(1921)、『高砂族調査書–第５編』(1938) の文献に基づいて、狩猟に関する調査項目を作成した。本調査は 2016 月８月 15 日～28 日に行い、現役で狩猟活動をしている対応者５名、過去に狩猟経験をもつ対応者３名、地方歴史が詳しい有識者１名の計９名に Taromak 族の狩猟事情について聞き取り調査を実施した。その他、録音できない対応者２名については口述筆記とした。

(1)狩猟のプロセス：聞き取り調査によって、Taromak 族における本来の狩猟活動の流れを次のようにまとめた。(01)出発前に不吉な兆を避ける夢占いをし、身体を清める、(02)夜明けごろ出発する、(03)猟場に入る際、安全を祈願して Asalisi(Parisi)をする、(04)山の入り口で鳥の声と動きによる鳥占いをする、(05)動物の足跡を追跡する、(06)ワナを設置する、(07)夜になると銃猟をする、しない場合は家に帰る、(08)山小屋に宿泊する、(09)仕掛けて一週間以内のワナを見に行く、(10)ワナに掛かった動物の体力が落ちるまで待ち、イディールで刺し殺す、(11) 神や祖霊に感謝の意を表すため Asalisi(Parisi)をする、(12)大きい動物は現地で解体し、燻製にする、(13)猟物を担いて村に戻り、特定の場で全村人に知らせる（報戦功）、(14)猟肉を分配する、(15)顎の骨を掛けて供養する。以上の狩猟行動の中で(01)(04)(06)(14)は、長年の狩猟経験を積み重ねない限り習得しにくいこと、肉の分配については調査対象者の一人は「とても複雑であり、猟物の脊椎、尾骨等なども分ける。私にとって学ぶことはまだまだ多い」と語った。また、ワナ猟は技術性が高いため若い世代は銃猟が中心になることや、上記の行動でも猟師達の間に認識のばらつきがあることが分かった。行動(13)(15)に関しては、現在の台湾では法律違反の証拠となり、特に自分の誇りを伝える行為である(13)は完全に行われなくなっている。(15)は山小屋で隠れて行う人がいる。

(2)狩猟の道具：山猟は、「ラボー(蛮刀、刃渡り 30 センチ)」に柄を挿した「イディール」を持ち、「バカール(小刀、刃渡り 20 センチ)」を腰に紐で着けて、背負い籠「カルダール」に里芋・米・アワ・ワイヤー・鉄ワナなどを入れて出発する。使用するワナの種類には、鳥類・ハクビシン・リスなどの小型動物を捕獲するための石板を用いたワナ「タウンヌ」、鳥類が踏むとワイヤーが絞まる脚くくりワナ「バレカコン」、ワナを枝に結びつけ他の枝の跳ね上げ力でワイヤーが絞まるムササビ用のワナ「トローコ」などがある。中型、大型動物(キョン、山羊、イノシシ、水鹿)の場合は、獲物が踏み板(竹)を踏み落とすと支えをうしなった生木が跳ねあがり、同時にワイヤーで足が締め上げられて捕獲する動物の脚くくりワナ「ザレーシ」がある。猟銃は「火神槍」という火縄銃の改良版であり、火薬を充填してから弾を入れ、そして発火薬を装填する。引き金を引き発射し、再装填する。

(3)狩猟の信仰：「Parisi といふ迷信は、Taboo と同じく、或る場合に於いて、物を用ひ、事を行ふに就き、一定の制限を立て、此の制限外の行為は、堅く禁ずるの習慣にて、若しも之を犯すときは、殃(わざわい)を受くると信じて居る。」とあるように、猟場には守り神、先祖の霊がいることを信じ、山肉の肝臓を小さく切り、米酒・檳榔・菓子を添えて捧げ、Parisi(Taromaku 族のみ Asalisi と言う)を通じて感謝の意、畏怖の意を表している。調査対象者は、「獲物に敬意を払い、その霊を連れて帰る。狩猟の過程で行う多くの Parisi(儀礼)は済度するためであり、彼が早く肉体から離れることである。捕まえたとき酒や水を用いて彼の残っている霊を安定させる。私の所に来ていい、私が負担できる、私があなたを受け入れる。あなたは私を受け入れてください。」と語った。また、狩猟に関連する「夢占い」「鳥占い」も Parisi の類である。多く共通して知られている「鳥占い」としては、山鳥（ダリカ）のオスが「ダリカ、ダリカ」と鳴き、メスが「キリッ、キリッ」と鳴くと上等。山に入ったら獲物が捕れる。「ダリカ」または「キリッ」のみの場合は山に入っても獲物は捕れない。「ダリカ」と鳴き、それでも山に入って獲物が捕れないとき「ロコーズ」などの山菜を採って帰る。「夢占い」の事例では、「私が毎週行っても収穫がないからだ！どうして他の人が置いたら掛かり、私だけ掛からないのかと戸惑った。その後、悪い夢を見た。古い部落から Kapaliwa まで、イノシシに追いかけられていて、そして目覚めた。どうして１ヶ月しても獲物が掛からないのか、狩猟をやっている年配者に聞いた。そして夢の中で、大きく毛も長い牛のようなイノシシがずっと私を追いかけた。彼は、これは悪い兆だ。あなたのワナは先祖の歩く道に置いてしまい邪魔になっている。置かないで」と語った。

(4)狩猟の名誉：Taromak 族には名誉の冠り物「アカモーツオ」がある。これはその家の女性が作る。自分で仕留めた大きなイノシシの牙と歯を正面に、中央後ろにクマタカの羽、その前にヤマユリの花が飾られ、冠り物の周囲はビーズの飾りで埋め尽くされている。調査対象者は、飾るものに対して「以前はイノシシの歯(キバ)があるオスを 10 頭も獲ったら頭目からユリの花を頂ける。あれは 100 斤くらい重いよ。またあの歯も頭に飾れる。それで猟師合格だ」と話した。すなわち、イノシシのキバとユリの花は、名誉的象徴性を持つものであり、今でも部族の間で共有されていた。

以上、Taromak 族の狩猟の実態には、技術の伝承はもちろんのこと、山肉の分配や神・祖霊に対す

る Asalisi(Parisi)の行為など、自然と対峙しながらも、「私達は人間だけでなく動物や自然とともに住むべきであり、人は自然と離れて楽しく過ごすことはできない。山肉でも植物でも大地から育ち、命を終えて食物となり、大地・先祖に感謝する」とあるように、誇り、分かち合い、感謝の心を持つ「生身」の狩猟における自然観が継がれている実態が確認できた。また、こうした自然観を持ちながら狩猟を実践し得る者が「真」の部族内で尊敬される猟師であることが理解できた。最近、Taromak 族は、政府の意思に反し、自由に「本来の自分たちの土地」で「自らの伝統的狩猟・植物採集文化」を守りながら「Taromak 族らしい」「誇り高き」生活ができることを要望するため、従来の伝統的猟域を取り戻すための自主的な公告を実施した。これらの実態から、Taromak 族における「狩猟行動・狩猟文化」の実相には、従来の「遊び仕事」の定義に加えて、「民族の誇り」「自然への畏怖と信仰」「共同体の堅持」などへの強い志向が内包されていることが明らかになった。

＜今後の展望＞

26～28 年度における本研究では、自然から「糧（食糧・活力）」を得る「遊び仕事」の自然共生的特質を探る過程において、台湾原住民族の「遊び仕事」に、日本とは異なる「在り方」を見て取った。

29 年度からの研究は、その継続研究として、台湾原住民族 Taromak 族の狩猟・植物利用・禁忌(parisi)・石板家屋などに関わる生活文化的側面に着目して、生活文化学・民俗学・建築学・森林科学の視角から現地調査を実施し、「遊び仕事」が内包する(1)自然共生的行動・共同体的規範、(2)エスニック・アイデンティティの象徴性、(3)ゲマインシャフト的社会維持機能、(4)自然信仰・祖霊信仰と融合した自然中心主義的世界観などについての実相を探り、日本との比較を通して(5)生活行動に組み込まれたサブシステンス性など、文化の基層としての「遊び仕事」の今日的意味・役割について、さらに考究していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

(1) 林依蓉・三橋俊雄、台湾原住民 Taromak 族における遊び仕事研究―生活に密着した植物採集事例を通じて、デザイン学研究、第 63 巻 6 号、11-20、2017（査読有）

(2)田中靖子・中村仁美・河西立雄・三橋俊雄、京丹後市袖志地区における水と暮らし-シミズ、カワ、イケ、イネの調査を通して、デザイン学研究、第 62 巻 2 号、25-30、2015（査読有）

〔学会発表〕（計４件）

(1) 林依蓉、台湾原住民タロマク族おける遊び仕事の意味―狩猟活動と民族の自立、現代民俗学会 2017 年度年次大会・個人研究発表、東京大学東洋文化研究所（東京都文京区）、2017/5/20（査読有）

(2) 林依蓉、台湾原住民 Taromak 族における遊び仕事研究(2)、日本デザイン学会第 4 支部研究発表会、京都工芸繊維大学（京都府京都市）、2017/1/28（査読無）

(3)三橋俊雄、林依蓉、台湾原住民 Taromak 族の自然共生と道具世界、道具学会/道具学研究発表フォーラム 2016、鎌倉・浄智寺（神奈川県鎌倉市）、2017/1/21（査読無）

(4)林依蓉、三橋俊雄、台湾原住民 Taromak 族における遊び仕事研究-生活に密着した植物採集事例を通じて、日本デザイン学会研究発表大会、千葉大学（千葉県千葉市）、2015/6/14（査読有）

６．研究組織

(1)研究代表者

三橋　俊雄（MITSUHASHI, Toshio）
京都府立大学・大学院生命環境科学研究科・研究員
研究者番号：６０２３９２９１

(2)研究分担者

田中 和博（TANAKA, Kazuhiro）
京都府立大学・大学院生命環境科学研究科・教授
研究者番号：７０１５５１１７

檜谷　美枝子（HINOKIDANI, Mieko）
京都府立大学・大学院生命環境科学研究科・教授
研究者番号：６０２３８３１８